

長野県立歴史館たより

2014年 冬号 vol.81

特集

平成26年度冬季展

「縄文土器展」

デコボコかざりのはじまり

Contents

- 冬季展「縄文土器展」デコボコかざりのはじまり
- 新収藏品から— 《筑摩県博覧会》
- 夏季展から— 「山とともに生きる」を振り返って
- 夏季展から— 校歌アンケートの結果
- 歴史館をさらに身近に—
 - 土器づくりの出前講座、古文書講座
- 行事アルバム— 大人の遠足 ほか
- 11～2月の行事予定



Photo T. Ogawa

冬季展

「縄文土器展」

デコボコかざりめはじまり

平成26年11月29日(土)～平成27年2月1日(日)



大石遺跡出土土器（原村教育委員会蔵）
（山梨県立考古博物館撮影）

今から五千年あまり前、すでに本格的な農耕社会に入っていた地域では、鉢や壺に彩色をして土器を飾っていました。一方、日本列島では東部を中心に、深い鍋（深鉢形土器）に粘土紐や造形物を貼りつける装飾が、極度に発達していきます。まさに、デコボコかざりの土器です。

今回の展示では、鍋としての使い勝手を悪くしてまでも粘土を盛りつけ、さらに器の形そのものも変形させていった縄文時代中期の土器のうち、特にデコボコかざりがはじまる段階に焦点を絞って、歴史的な変遷を追います。

例えば、八ヶ岳西南麓～西関東では、中期中葉に移る前後、立体的な顔面装飾が発達していきます。ついには、顔だけでなく、身体を持つ土偶装飾付き土器も現れます。当初、遠慮



寺所Ⅱ遺跡出土土器
（山梨県北杜市教育委員会蔵）

気味に口縁部にしがみついていた土偶(写真上)は、主役であることを主張するかのよう大型化し、上方に突出し、デコボコ化の道をたどります(写真左)。

これらの土器

の楽しさは、正確な形を平面(器面)に写し取るのではなく、ヒト・ヘビ・カエル等の立体感や躍動感を、そのまま表現しようとしている点にあります。はじめて縄文土器を見る子どもたちも、今にも動き出しそうな表現に、親近感を持ってもらえればと思っています。

イベントでは、こうした縄文人たちの感性を体感していただくため、縄文風ゾートロープ工作、写生・ぬりえ大会、体で表現するデコボコかざり等をご用意しました。冬休みに、ご家族で楽しんでいただければと考えています。

また、全国初として、20世紀後半、縄文土器編年研究の一翼を担った県内の資料が一堂に会します。例えば、^{むじなざわ}貉沢式土器、^{あらみち}新道式土器、^{こたつぼら}後田原式土器、^{ひらいで}平出第3類A土器、^{うしろおき}後沖式土器、^{やけまち}焼町式土器古段階、これらの命名に絡んだ代表的な遺跡の土器群が勢揃いします。

縄文土器研究者だけでなく、さまざまな方々に楽しんでいただけることと確信し、ご来館をこちらよりお待ちしております。



大石遺跡出土土器（原村教育委員会蔵）

新収蔵品から《筑^{ちく}摩^ま県博覧会》



《筑摩県博覧会》明治6年(1873)三代歌川広重画 25.0×37.0cm 錦絵

明治6年(1873)11月、松本城天守閣を会場に開催された松本博覧会(作品タイトルでは「筑摩県博覧会」)の様子を描いた錦絵(多色刷り木版画)です。絵師は三代歌川広重、画面右下には発行元の「博覧会社」が記されています。

右上の松本城を会場に、博覧会開催に賑わう城下のようなすが描かれていますが、中でも、天守閣の屋上には「博覧会」と大書された旗が、画面枠から完全にはみ出して、メイン会場であることを一際強調しているようです。

画面中央を横切る女鳥羽川には、輸送舟が行き来し、大手橋(現在の千歳橋)のたもとの題箋には「通船会社」と書かれています。他の題箋には「浅間温泉」「中町」などの地名や、「県庁」「医費兼病院」「開智学校」などの施設名が記されています。

町内は日本絵画伝統の「すやり霞」で区別されますが、霞の内部は毒々しい赤色で刷られています(輸入品の化学染料の赤色は、明治初期の「開化錦絵」を象徴する色彩でした)。

画面上下の余白は、博覧会の沿革や趣旨を長々と述べた文章で占められ、そこには、来年には常設の博覧会場とし、ゆくゆくは「世界万国に及ぼし盛大の博覧常備場」とする壮大な計画が述べられています。

しかしこの当時、松本城は取り壊し寸前の状

態にあり、前年の明治5年には天守も競売に出され、落札者も決定していました(作品中でも、大手門が既に取り壊されています)。この危機を救ったのが市川量造という人物でした。市川は筑摩県権令(知事)の永山盛輝宛に、博覧会の重要性和、松本城が「博覧館ニ用ルニ適當」(信飛新聞2号)であることを訴え、今後10年間は破却を延期してほしいと願い出たのです。

幸いにして市川の請願は聞き届けられ、明治6年11月11日より一ヶ月間の会期で博覧会が開催されること

になりました。筑摩県も、開催に先立ち「天産人造ノ物種ヲ始メ新機器古器物等」(『明治六年博覧会新聞誌書類留』)の出品を奨励するなど協力し、開会後の来場者は「日々四五千人ヲ下ラズ」(信飛新聞12号)という盛況で、会期を延期して12月24日に終了しました。

残念ながら、松本博覧会の展示内容の詳細を知ることはできませんが、当館所蔵の行政文書『明治六年博覧会新聞誌書類留』には出品記録の一部が残されています。それによると(真贋は別として)雪舟・狩野探幽・池大雅の絵画、陶磁器、そして刀剣や武具甲冑などの古美術品の他、地元産の鉱物や生糸などが確認できます。さらに、東京の博覧会事務局からは各種の剥製や標本が届けられ、そして山梨県からも生糸・水晶などの特産品が出品されています。

また、翌年に同じ会場で開催された松本博覧会の目録(『明治期府県博覧会出品目録 明治四年～九年』所収)によると、田中芳男による西洋からの将来品や、中には「陰陽石」「両頭蛇骨」などかなり怪しげな物品も陳列されていたようです。おそらく明治6年の博覧会にも、筑摩県全域一すなわち現在の長野県中南信と岐阜県飛騨地域から出品された、あらゆる展示品が雑然と陳列されていたことでしょう。

(林 誠)

夏季展「山とともに生きる」を振り返って



展示解説

7月26日(土)から8月31日(日)までの33日間、夏季展「山とともに生きるー『信州 山の日』制定を記念してー」を開催し、4,600名ほどの来館者をお迎えしました。本年度から7月第4日曜日と制定された「信州 山の日」は、「県民共通の財産であり、貴重な資源である『山』に感謝するとともに、『山』を守り育てながら活かしていく機運の醸成の機会とする」ことを趣旨としています。これを受けて当館では、原始から近現代に至る歴史のなかで、信州の人々が山とどのように関わってきたのか、その歴史を展示しました。

通時的な展示を目指し、原始の黒曜石から、近世の「木曾式伐木運材図会」、近代の山岳絵画や登山雑誌、登山パンフレットなど多くの分野を網羅した内容は、一見まとまりがなく、ひとつのテーマを掘り下げる深みに欠けたことは否めません。アンケートでは「もっと山の道具を見たかった」「テーマを絞った展示が見たかった」などというご意見もいただきました。

一方で「予想とは違った山の世界を見ることができた」「山にもいろいろな側面があることが

分かった」という声も寄せられました。多岐にわたる展示内容は、山のもつ魅力や価値に様々な角度から光を当てることができ、山を「再発見」するきっかけになったのではないかと思います。

開催初日に行った講演会では、いづな歴史ふれあい館の小山丈夫氏に「飯綱信仰について」と題してお話いただきました。「いづな」という語の由来から飯綱権現の図像、飯綱信仰の歴史まで明晰かつ熱のこもった講演に、山岳信仰に興味をもつ多くの来場者がメモを取りながら熱心に聞き入っていました。今回の展示では深遠な山岳信仰の世界を扱うことができませんでしたが、山岳信仰は山に関わる重要な分野です。今後の研究課題にしたいと考えています。



「校歌に詠まれた山々」の展示

また、今回の展示の一環として、各地域で親しまれてきた山を具体的に知るために、県内の小中高校の校歌における歌詞に登場する山の名称を調査しました。調査にご協力いただいたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。なお内容の詳細は次頁をご覧ください。



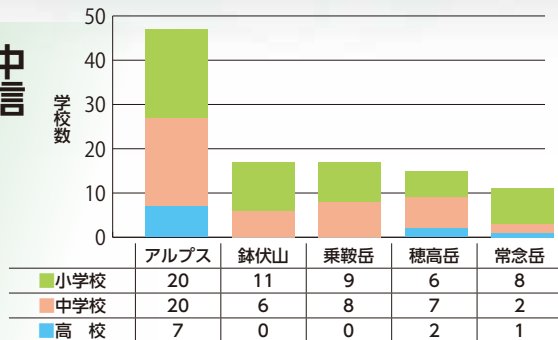
吉田初三郎「長野県の温泉と名勝」(当館蔵)

県内の校歌に詠まれた山々

夏季展「山とともに生きる」に合わせ、県内すべての小・中・高等学校の校歌に詠まれた山に関するアンケート調査を実施しました。多くの学校の校歌に地域の里山やアルプスの山並みが刻まれ、ふるさとのシンボルとなって県内の児童・生徒に歌い継がれていることが明らかになりました。

調査にご協力いただきました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

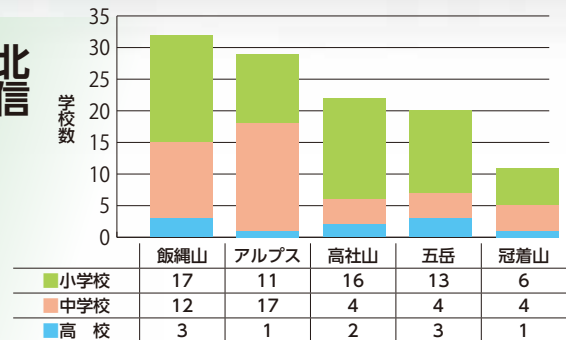
中信



（調査数…小学校78校、中学校53校、高校19校）

- 圧倒的に多く出てくる表現が「アルプス」（「北アルプス」と「日本アルプス」を含む）。松本市、塩尻市、安曇野市、大町市、池田町、生坂村、小谷村、朝日村、麻績村と、多くの市町村の学校の校歌に詠まれている。北アルプスの乗鞍岳、穂高岳、常念岳、槍ヶ岳、白馬岳といった個々の山もよく出てくる。中学校の登山でおなじみの山々でもある。
- 松本市南部から塩尻市にかけては、鉢伏山が多く出てくる。塩尻市立小学校に限ってみると、9校中7校に出てくる。木曽地方では、御嶽山と駒ヶ岳（木曽駒）が、同地区小中高校の半数近い8校に登場。各地区の地域の山がわかる。

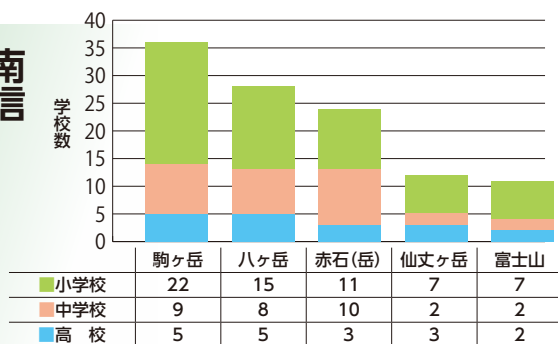
北信



（調査数…小学校113校、中学校49校、高校23校）

- 五岳の個別名称では飯縄山が32校と突出して多く、戸隠山6校、斑尾山4校、黒姫山4校、妙高山3校が続いている。飯縄山は北信地方の多くの学校から広範囲に見えるためと考えられる。
- 高社山が校歌に詠まれている学校は22校。特に中野・飯山地域の小学校19校中14校に登場する。この地域を代表する山といえる。
- 冠着山は千曲市の9小学校中6校（67%）、中学校では4中学校全ての校歌に登場する。姨捨山とも呼ばれる冠着山は、千曲市を代表する山となっていることがこの結果からわかる。

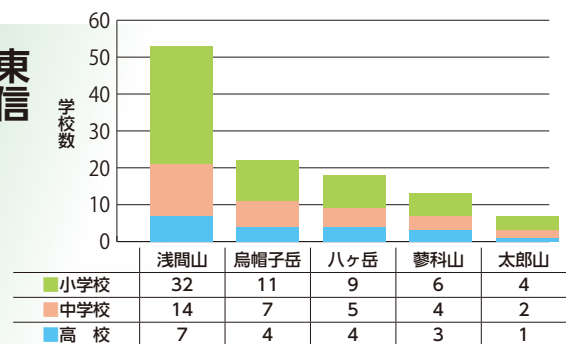
南信



（調査数…小学校111校、中学校52校、高校24校）

- 上伊那地方と言えば「駒」である。同地方の小学校54%、中学校64%、高校63%に出てくる。
- 諏訪地方と言えばハヶ岳である。同地方の小学校50%、中学校50%、高校56%に出てくる。「ハヶ嶺」「ハが嶺」「八つが嶺」「八つの峰々」「ハが高嶺」など表記の違いはあるものの、「やつ」の山として親しまれている。
- 長野県では、全地区（北信、東信、中信、南信）で富士山を望むことはできるが、その中でもっとも見やすい位置にある南信では11校（小中高あわせて岡谷市4校、諏訪市4校、富士見町2校、下諏訪町1校）に富士山が登場する。今回の調査で上位20位に入る唯一の県外の山である。

東信



（調査数…小学校71校 中学校33校、高校17校）

- 浅間山が53校と突出して多い。上田地区10校だが、佐久地区は43校。佐久地区では全小中高校の65%の学校の校歌に登場する。この地域を代表する山といえる。
- 上田地区の校歌で特徴的な山は、烏帽子岳（22校）と太郎山（7校）。烏帽子岳は、上田地区の全小中高校の40%の学校の校歌に登場する。一方、太郎山は上田市街地を見下ろす里山であり、地域に親しまれている。「遠くに望む烏帽子岳」、「身近な里山太郎山」と対照的な二つの山が校歌に詠まれている。
- 上田盆地や佐久平など地形的特徴がある地域で、人々の目をひく浅間山や烏帽子岳など存在感のある山が校歌に詠まれている。

※紙面の都合で、各地区上位5つの山のみグラフで示しています。

縄文人はすごい!

出前講座で土器づくり



当館では、土器を「見る」だけでなく、「さわる」「つくる」など、体感することで歴史に親しみ、理解が深まることを目指しています。学校見学でのバックヤード探検では、一人ひとりが縄文土器と弥生土器をもち比べる活動を取り入れ、大好評をいただいています。

出前講座も可能な限りお引き受けしています。9月には、小学校の社会科学習の一環として親子土器づくり教室(授業参観)に参加しました。子どもたちだけではなく、保護者のみなさんまで夢中になって粘土をこねている姿が印象的でした。子どもたちからも「土器づくりの大変さがわかり縄文人はすごい!」との声が聞かれました。

古文書に^な馴れよう!

古文書講座の活動より

今年度の古文書講座初級A・Bは、「古文書にふれ、古文書に馴れましょう」というテーマのもとに始まりました。

第1回では「読むことに馴れる」を目標に、釈文や慣用句を読み合わせて古文書独特の言い回しに馴れる時間としました。第2回では、「くずし字に馴れる」を目標に、かつての寺子屋での学習にならない、国名、村名、人名にふれた後、手紙文を皮切りにいくつかの文書を解読しました。

昨年度、古文書の解読のみならず、身近な地域の歴史的事象や時代背景にふれた解説が受講者の方々に好評でした。そのため、今年度も善光寺地震や戊の満水、犀川通船など県内の歴史的事象に関わる文書を扱いました。こうした文書の解読を通して、写真や地図、絵図などで地域の歴史を紹介しました。

第3回目では、「かな文字に馴れる」を目標にかな文字がふんだんに使われている県歌「信濃の国」の墨書をテキストに、多くのかな文字にふれました。受講者からは「歌詞がわかっているだけに調べやすく、楽しかった」という感想をいただきました。受講者の大半は学齢期に県歌「信濃の国」を歌った経験があり、現在も学校現場で歌い継がれていることを伝えると驚いていました。歌詞の意味を聞き、懐かしそうな表情でDVDに合わせて県歌「信濃の国」を歌う受講者の姿が印象的でした。



受講者が多い古文書講座初級B（第2回）の様子

大人の遠足 南朝の拠点、大鹿村(大河原・鹿塩)をたずねて

当館では、信州各地の歴史を学ぼうというイベント「大人の遠足」を、公益財団法人八十二文化財団との共催で行っています。4年目となる今回は、大鹿村を舞台として、講義(9月25日、10月2日)と現地見学(10月9日)を行いました。

例年たくさんの方にお申し込みいただき、バス定員の関係で参加者をやむなく抽選で決めさせていただいている状況ですので、今年の内容や様子を紙上にてご紹介します。



講義では「自然と暮らし」「歴史と文化」という2つのアプローチから大鹿村の魅力に迫ります。



塩づくりの実演。地下から出る塩水を煮詰めて、珍しい山塩ができます。昼食も山塩を使った料理をいただきました。



薬師如来座像と阿弥陀如来座像が堂内に併存する重要文化財・福德寺本堂にて。



日本最大の断層である中央構造線の上に立つ博物館。自然の織りなす神秘を体感しました。



宗良親王を守護した香坂高宗の居城・大河原城趾



上蔵地区の美しい景観を見ながらの散策

■平成26年度(2014～2015) 11月～2月の行事予定



11月

休館日
4・10
11・17
25・26

秋季企画展

信濃武士の決断
～信長・秀吉・家康の時代～
9 / 27(土)～11 / 9(日)

講座・イベント

森将軍塚まつり 11 / 3(月・祝)

「地域と共働した」連携講座①

11/22(土)13時30分～16時
『信州地域史料アーカイブ』の紹介と活用
講師：長野県図書館等協働機構理事長 宮下明彦氏
『地震後世俗話之種』に描かれた善光寺御開帳
講師：長野郷土史研究会会長 小林一郎氏

12月

休館日
1・8
15・22
26・27
28・29
30・31

冬季展

縄文土器展
デコボコかざりのはじまり
～縄文時代中期：
立体的な土器装飾への道～

11 / 29(土)～2 / 1(日)

●講座

11 / 29(土)13時30分～
「デコボコかざりのはじまり」
講師：当館職員

●イベント

12 / 20(土)13時30分～
「縄文風クリスマスリース・
ゾートロップを作ろう」

●イベント

1 / 10(土)13時30分～
「からだで表現！デコボコかざり撮影会」

●イベント

2 / 1(日)13時30分～
「縄文土器写生・縄文土器めり絵等 優秀作品表彰式」

●毎週土・日・祝日

(ただし休館日をのぞく)
土器スケッチ「ホンモノの土器を描こう！土器めりえ」

1月

休館日
1・2
3・5
13・14
19・20
26

2月

休館日
2・3
9・12
16・23
24・25

春季企画展

山と海の廻廊をゆく
～信濃と北陸をつなぐ道～
2 / 28(土)～5 / 17(日)

考古学講座in尖石

12 / 6(土)
「立体的な土器装飾のはじまりと千曲川流域の土器」
講師：当館考古資料課 寺内隆夫
会場：茅野市尖石縄文考古館

やさしい信濃の歴史講座

『善光寺道名所図会と街道の風景』
第1回 12/6(土)13時30分～15時10分
青木隆幸 道が結ぶ夢
～「善光寺道名所図会」の魅力～
岸田恵理 江戸時代の名所絵
～「善光寺道名所図会」から～
第2回 12/13(土)13時30分～15時10分
畔上不二男 街道の分岐点に栄えた
洗馬宿と塩尻の今昔
金澤大典 旅人・文化人・登山客の
憩いの場 ～浅間温泉～

やさしい信濃の歴史講座

第3回 1/17(土)13時30分～15時10分
中野亮一 峠を越えて、いよいよ善光寺平へ
～筑北・峠捨～
市川 厚 養老坂を越え、
仁科街道を安曇・大町へ
第4回 1/31(土)13時30分～15時10分
徳島隆治 七久里の湯に開いた文化
～別所温泉～
白沢勝彦 上田藩を育んだ上田城下から
海野・田中の合宿へ

近世史セミナー

1 / 24(土)10時40分～15時40分
「近世史料と文書調査」

やさしい信濃の歴史講座

第5回 2/7(土)13時30分～15時10分
宮本 博 街道屈指の難所
横吹坂を越え坂本宿へ
遠藤公洋 「飯綱」「戸隠」を訪れた人々と、
描かれた霊場
第6回 2/14(土)13時30分～15時10分
傳田伊史 北陸と善光寺をむすぶ道
～北国街道の往来～
織田顕行氏(飯田市美術館学芸員)
聖徳太子信仰のひろりと善光寺

「地域と共働した」連携講座②

2/21(土)13時30分～16時
「信濃史料のデジタル化と長野県の歴史研究」
講師：当館総合情報課長 福島正樹
「原本史料の読み直しと信濃史料」
講師：東京大学史料編纂所教授 田島 公氏

表紙の写真

《原村比丘尼原遺跡 人面装飾付土器》

平成13年(2001)、圃場整備事業に伴う発掘調査で、堅穴住居跡の埋土中から出土した。縄文時代中期中葉初め(約5,300年前)の土器である。この時期、ヒトやヘビ等を模した飾りが器の上方に飛び出したり、側面に盛りつけられるようになる。目を閉じて触れた時の凹凸感で、装飾の主役がわかる「デコボコ飾り」のはじまりである。

行事アルバム



歴史館で夏休み

8月8日(金)から10日(日)の3日間、4つのイベントを開催したところ、多数の来館者で大にぎわいとなりました。夏休みのひととき、普段は見られない館内を探索したり、石のアクセサリや古銭をつくったりと、親子で楽しむ姿が見られました。



博物館実習

8月19日(火)から29日(金)までの10日間、大学生5名が2週間にわたる博物館実習に参加しました。学芸員の仕事に触れ、博物館の役割について体感していた様子です。



中学生の職場体験学習

9月上旬、歴史好きの中学生4名が来館し、職場体験学習として各課のさまざまな仕事を3日間体験しました。遺物や史料を目にしたときのキラキラ光る瞳が印象的でした。10月下旬まで、さらに数校の中学生が来館予定です。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.81

2014年(平成26)10月30日発行

編集・刊行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 富士印刷株式会社